

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（218）

2009年10月

### （218）ネコにはドッグフードを与えないこと

よくキャットフードとドッグフードは同じようなものだと考えている人がいますがそれは大きな間違いです。犬にキャットフードを与えた場合のリスクと猫にドッグフードを与えた場合のリスクを考えると猫にドッグフードを与えた場合のほうが問題が大きく、場合によっては猫は短時間で死ぬこともありますし失明することもあります。犬にキャットフードを与えても高価なタンパク質を必要以上に食べさせることになり、与え続ければ結果として腎臓機能に問題を起こすことなどは知られています。

猫の栄養要求量は犬のそれとは相当に異なっています。まず猫のタンパク質要求量は犬のそれよりも格段に高いということです。猫が高タンパク質を必要とする代謝上の理由には猫の肝臓にあるアミノ酸分解代謝（異化）酵素の活性が高いということに起因します。犬の場合はアミノ酸の一つであるアルギニンはほとんど必要ありませんが、猫の場合はアルギニンが皆無の原料で作られているフードを与えれば数時間で死ぬこととなります。また、猫はタウリンを必要としています。犬は必要としていません。猫に不十分な量のタウリンを与えれば網膜の中央部が退化して失明します。

成犬の維持を兼ねた粗タンパク質の含有割合はドッグフードの乾物ベースで18%～25%程度です。成長段階の子猫の場合は高い生物値を持った粗タンパク質で35%程度です。成猫の維持の場合は最低で25%はキャットフードの乾物ベースが必要です。

猫は犬のようにリノール酸（n-6系）をアラキドン酸に潤沢に変換することが出来ないため肉類、魚類、卵などアラキドン酸を含む原料をフードの一部として与える必要があります。もしアラキドン酸が足りない状態が続けば毛が光沢のないパサパサした感じになり、酷く欠乏した状態であれば痩せてきてじめじめした皮膚病が体のあちこちに出るようになります。

猫は犬のように植物に含まれるベータ・カロチンをビタミンAに変換することが出来ないため、ビタミンAを含むレバーなど動物組織、魚油、卵などを与えなくてはなりません。また、猫は犬のようにアミノ酸の一つであるトリプトファンをナイアシン（ニコチン酸）に変換することが出来ないためキャットフードにはナイアシンを多く入れなくてはなりません。

このような理由からも猫には栄養的にバランスの取れた市販のキャットフードや自家製の

フードを与えることが大事です。一般的に猫には一つの原料だけに偏ったフードや市販のキャットフードを与えないほうがよいです。このように偏ったフードは時折一部のグルメ・キャットフードなどに見受けられますので、そのようなフードを与えるときは猫が食べる全体量の25%以上にならないようにしたほうがよいのです。

このように猫にはドッグフードは与えないことを鉄則にしたほうが間違い無いことがお判りになると思います。これらは米国科学アカデミーの猫のNRC、アイオワ州立大学のジャーゲンズ教授の家畜飼養・栄養学、オハイオ州立大学のワードロー教授とスタンフォード大学のインセル教授による栄養学、イリノイ大学の故コルビン名誉教授のコンパニオン・アニマルに関する諸々のエクステンション刊行物等から得ています。

余談ですが、筆者と家内は大の猫好きで40年前に米国からアメリカ大豆協会の家畜栄養担当として赴任した当時、当時の日本代表に貰った子猫（日本猫）を大事に育て23年間の長きにわたって生活を共にしました。牛や豚・鶏の栄養生理の応用で猫のフードや栄養のこともある程度判っていたことが幸いしたと思います。因みに名前はノラと名付けましたが、これはイブセンの「人形の家」の主人公であるノラから取ったものでした。「人形の家」のノラは自我に目覚めて家を出ていきますが、私共のノラは一生を家で勝手気ままに毅然と過ごし、看取られて終わりました。それ以後は私共の年齢と寿命から考え、猫を飼っても後に残す可能性が高いので飼っていません（瀬良、2009）。